

学 位 論 文 要 旨

氏 名 松岡優菜

題 目 性暴力被害者における自己客体化に着目した心理的支援の検討

本邦における性暴力被害について、女性の約13人に1人が遭遇していると報告されており（内閣府男女共同参画局，2023），性暴力被害者への心理的支援は喫緊の課題である。特に，性暴力被害者は，心的外傷後ストレス障害（post-traumatic stress disorder；PTSD）発症率が高いことが知られている（Dworkin, 2018）。これまで，PTSDに対しては，否定的認知や回避的対処を治療ターゲットとした（Ehlers&Clerk, 2000；Foa&Kozak, 1986）トラウマに焦点化した認知行動療法がゴールドスタンダードとされてきた（National Institute for Health and Care Excellence, 2018）。しかしながら，従来の治療法は脱落率が高く，個人の特徴に合わせてプロトコルを調整することが，今後のPTSD研究に求められていることが示唆されている（Bomyea&Lang, 2012）。

そこで，本研究においては，性暴力被害者には，モノとして扱われた体験がある（齋藤・大竹，2020）ことから，自己客体化という新たな心理的要因に着目して検討を行う。自己客体化とは，モノとして扱われた体験によって，自身をモノとして評価する傾向のことである。モノとして扱われた体験は，性暴力被害者の傷つきの中核であることが，インタビュー調査から明らかにされている（齋藤・大竹，2020）。これらのことから，性暴力被害者への心理的支援の際には，自己客体化の影響性について考慮するなど，他のトラウマとは異なる治療ターゲットを設定する必要があると考えられる。しかしながら，自己客体化が実際にPTSD症状に影響を及ぼしているのかを検討した研究は見当たらない。

そこで，本研究では，本邦における性暴力被害者における自己客体化の実態を解明し，自己客体化がPTSD症状に及ぼす影響とその緩和要因を明らかにすることを目的に検討を行った。まず，第1章では，性暴力被害や自己客体化のこれまでの研究を概観し，課題点を整理した。そこで，性暴力被害は深刻であり，支援が求められている現状を示した。また，個人の特徴に合わせた心理療法の実施がPTSD症状の低減に効果的であり，モノとして扱われた体験の影響性という新たな要因を考慮する必要があることを示した。

そして，第2章においては，自己客体化に，①身体的/外見的側面と，②主観的な自己感覚の喪失といった2つの側面があるため，自己客体化を評価するための2つの自己報告式尺度の日本語版を開発し，その信頼性と妥当性を検討した。その結果，自己客体化を測定する2つのツールは，信頼性・妥当性を有することが明らかとなった。

第3章では、自己客体化とPTSD関連変数との関連性の検討を行い、主観的な自己感覚の喪失を反映する自己客体化がPTSD関連変数と関連することを明らかにした。

第4章では、自己客体化がPTSD症状にどの程度影響を及ぼしているのか、従来の治療ターゲットである否定的認知や回避的対処を統制したうえで検討を行った。また、探索的に、QOLに対する影響についても検討を行った。その結果、性暴力被害以外のトラウマ体験者では、従来の治療ターゲットである否定的認知が最もPTSD症状に影響を及ぼしていたのに対し、性暴力被害者においては、自己客体化の下位因子である自律性の欠如が最もPTSD症状に影響を及ぼしていた。そして、PTSD症状からQOLへの影響性はみられなかったものの、性暴力被害者では自律性の欠如がPTSD症状に悪影響を及ぼすことが示された。

第5章では、第2章から第4章で得られた知見を踏まえて、自己客体化とPTSD症状の関連性を調整する要因としてセルフ・コンパッションに着目し、その調整効果を検討した。その結果、自己客体化はPTSD症状に影響を及ぼしており、セルフ・コンパッションの自己批判と孤立が緩和要因である可能性が示唆された。

最後に、第6章では、第1章から第5章まで得られた結果をまとめ、総合考察を行った。具体的には、本研究で自己客体化を測定するツールが開発されたことによって、心理的介入前後のアセスメントに役立つ可能性を考察した。また、PTSD症状に対する自己客体化の影響について検討したことによって、これまで不可視であった自己客体化の影響性を考慮する必要性を示したことを考察した。そして、本研究は横断研究であったなどの限界点があるものの、自己客体化とPTSD症状の関連性を緩和するためにはセルフ・コンパッションに着目した支援が有効である可能性が示唆された。